

八ヶ岳 阿弥陀岳北西稜

小暮

【日時】 2008年12月6日(土)~12月7日(日)

【メンバー】 L小暮、笹川

八ヶ岳の雪稜ルートは幾つも登ってきたが、今回いよいよ西面のバリエーションルートとしては難しいとされる阿弥陀岳北西稜に向かうことになった。取付きを迷う可能性もあったので、初日はアプローチとしてベースキャンプまでとして、余裕を持って望もうということになった。



岩稜入口より阿弥陀北西稜

前夜は道の駅小淵沢で阿弥陀岳北稜&赤岳主稜に向かう藤岡パーティと一緒に入山祝いをする。我々が目覚める前に藤岡さん達は出発していったが、のんびりと起床して美濃戸口へ車を回す。今回は美濃戸山荘まで車で入らずに下から登っていく。前日の南岸低気圧は、麓では雨だったようで林道の雪は少ないが、山では雪だったのか次第に雪が多くなる。南沢沿いの登山道を進んで、北西稜の取付き付近の広場にテントを張った。時間があるので取付きを偵察してトレースを途中まで付ける。あとは水汲みに行者小屋まで往復し、残った時間でビーコン訓練をして過ごした。かなり冷え込んで寒かった。

翌朝はまだ暗い中を昨日つけたトレースを辿っていく。摩利支天沢右岸を忠実に辿って尾根状を登っていく。雪の深さは膝下程度だが、斜度が急になるにしたがって部分的に腰ラッセルとなりペースはあまり捗らない。北西稜は阿弥陀岳の影に隠れて太陽がなかなか差し込まず寒々しい。ルート図の露岩のところは右の草付きを巻くとあるが、大きく巻くには右側は崖となって切り立っているので正面の岩を避けるようにロープを出して右の凹角から灌木の方へ抜ける。そこからは暫く穏やかな稜線となる。小ピークを過ぎてからはⅡ級程度の草付きの岩稜帯が続く。ノーザイルで慎重に進む。次第にリッジ状となるのでアンザイレンしてコンテで進み、リッジをトラバースして急な雪壁をスタカットに切り替えて



雪壁を登る

登っていく。小暮、笹川とツルベで2ピッチ登り平坦なところで大休止。

すぐ正面には垂壁（後で確認したところここが第一岩壁）となっていて直登はためられ、ルートに迷い左側のバンドを偵察するが上がる場所が見当たらず戻ってくる。正面にはビレイ点のペツルアンカーはあるが、直上方向にはランニングのピンは見当たらない。右側に少しトラバースすると古いハーケンが凹角にあるので、思い切ってハイステップで岩を乗り越しリッジに乗る。そこからは一部馬乗りとなるナイフリッジを進むが、積雪が多いがサラサラ雪なのでアックスも利かず、一手一手雪を払ってはオーバー手袋を外してホールドを掴み、一步足を上げるといった動作でかなり時間を掛けてしまう。残置ピンが非常に少なく慎重になってしまう。40mロープを伸ばしてリッジ上でビレイ。ツルベで岩稜を進み第二岩壁の明瞭なビレイ点まで進む。この2ピッチがとにかく時間が掛かった。あとから他の記録を見ると右側をずっとトラバースして行って草付きを登るほうが楽だったようだ。かなりしびれる登攀だった。

第二岩壁は正面はピンが見当たらず厳しそうなので、ノーマルルートとされている北壁側の急なバンドを辿り、そこから右上に続くバンドを上がったテラスでピッチを切る。テラスからは、二段の凹角に残置ピンが連なっているので、アブミを使って人工登攀する。最後の一步がアブミの最上段に乗ってガバを掴んで岩の上に這いあがるのだが、かぶり気味の岩に両手でぶらさがるような格好になるのでしばし躊躇してようやく乗り越した。



ナイフリッジの登攀

これで事実上の登攀は終了。最後はやさしい雪壁を登り頂上に着いた。16時を回ってしまった。岩の上に新雪が乗った状態で条件は良くなかったとはいえ、少々時間がかかりすぎた。急いで下山に取り掛かる。降りられるか心配していた中岳沢の下降もトレースもあり、雪も安定しているので問題なく下降できた。急ぎ足でベースキャンプに戻るとあっという間に日が暮れた。ヘッドランプの明かりを頼りに滑り易い凍結した登山道を降りるが、足元が暗いのでやはり時間がかかった。美濃戸山荘で下山連絡先の大野さんに電話して、更に美濃戸口までの林道を下った。

【行程】

12/6 美濃戸口(8:50)～美濃戸山荘(9:40)～北西稜取付き付近広場BC(12:10)

12/7 BC(6:10)～岩峰(7:00)～リッジ手前(9:15)～最終ピッチ上(15:40)～阿弥陀岳(16:10)～BC(17:10/30)～美濃戸山荘(19:00)～美濃戸口(20:10)

【地形図】八ヶ岳西部、八ヶ岳東部